

翻訳

狐と兎と雄鶏(No.14) 他 Лиса, заяц и петух(Аф.14) и др.

アフナーシェフ収集「ロシア民話」より
перевод сказок из сборника
«Народные русские сказки А. Н. Афанасьева»

水上 則子¹
MIZUKAMI Noriko

はじめに

A.H. アフナーシェフの収集によるロシア昔話集から、No.14, 36, 56, 82, 159, 267, 268, 269 の7編を訳出した。このうち、No.14とNo.56を除く6編は、金本源之助・中村喜和などによる日本語訳が刊行されているが、以下のような方針に基づいて改訳を試みたものである。

1)ロシア語で使用されている用語や表現を可能な限り忠実に日本語に移す(具体的には、*сметана* を「クリーム」のように訳すのは避け、「スメタナ」とするなど)

2)原文にない修飾語を付加したり、原文にある語を省いたりすることを最小限にする

3)題名は可能な限り直訳し、話の内容を付記するなどして改変することは避ける

また、訳出した8編のうち、No.159, 267, 268, 269 は「魔法昔話」だが、魔法昔話の翻訳に際しては「だ・である」を用い、それ以外の昔話の翻訳には「です・ます」を用いた。

No.14 Лиса, заяц и петух (狐と兎と雄鶏)

昔々あるところに狐と兎がいました。狐の小屋は氷でできていて、兎の小屋は樹皮でした。

美しい春がやってきました。狐の小屋は溶けました。兎の小屋は元通り立っていました。狐は、兎に、あたたまらせてほしいと頼み、兎を追いだしてしまいました。兎は道を歩きながら泣いています、すると向こうから犬たちがやってきました。「わんわんわん！兎くん、何を泣いているの？」兎はこう言います。「犬君、ほっといて！どうして泣かずにいられる？僕には樹皮の小屋があって、狐のは氷の小屋だった、狐は僕の所へ来て頼んでさ、僕を追いだしたんだ」「泣かないで、兎くん！ーと犬たちは言います。ー僕らが狐を追い出してやる」「無理だよ！」「追い出せるとも！」小屋のところへやってきました。「わんわんわん！狐、出てこい！」狐はペチカからこう言います。「飛び出してやる、ぴよんと出てやる、ばらばらにして小道にばらまいてやる！」犬たちはびっくりして逃げて行ってしまいました。

兎はまた道を歩きながら泣いています、すると向こうから熊がやってきました。「兎くん、何を泣いているの？」兎はこう言います。「熊君、ほっといて！どうして泣かずにいられる？僕には樹皮の小屋があって、狐のは氷の小屋だった、狐は僕の所へ来て頼んでさ、僕を追いだしたんだ」「泣かないで、兎くん！ーと熊は言います。ー僕が狐を追い出してやる」「無理だよ！犬くんたちも追い出そうとしたけどできなかったんだ。君も無理だよ」「追い出せるとも！」追い出しにやってきました。「狐、出てこい！」狐はペチカからこう言います。「飛び出してやる、ぴよんと出てやる、ば

らばらにして小道にばらまいてやる！」熊はびっくりして逃げて行ってしまいました。

兎はまた道を歩きながら泣いています、すると向こうから雄牛がやってきました。「兎くん、何を泣いているの？」兎はこう言います。「雄牛君、ほっといて！どうして泣かずにいられる？僕には樹皮の小屋があって、狐のは氷の小屋だった、狐は僕の所へ来て頼んでさ、僕を追いだしたんだ」「行こう、僕が狐を追い出してやる」「無理だよ！犬くんたちも追い出そうとしたけどできなかった、熊くんも追い出そうとしたけどできなかった、君も無理だよ」「追い出せるとも！」小屋のところへやってきました。「狐、出てこい！」狐はペチカからこう言います。「飛び出してやる、ぴょんと出てやる、らばらにして小道にばらまいてやる！」雄牛はびっくりして逃げて行ってしまいました。

兎はまた道を歩きながら泣いています、すると向こうから大鎌をもった鶏がやってきました。「こけこっこー！兎くん、何を泣いているの？」兎はこう言います。「鶏君、ほっといて！どうして泣かずにいられる？僕には樹皮の小屋があって、狐のは氷の小屋だった、狐は僕の所へ来て頼んでさ、僕を追いだしたんだ」「行こう、僕が狐を追い出してやる」「無理だよ！犬くんたちも追い出そうとしたけどできなかった、熊くんも追い出そうとしたけどできなかった、君も無理だよ」「追い出せるとも！」小屋のところへやってきました。「こけこっこー！肩には大鎌、狐を刈ってやる！狐、出てこい！」狐はこれを聞いて驚き、こう言います。「着替えています」鶏はまた言います。「こけこっこー！肩には大鎌、狐を刈ってやる！狐、出てこい！」狐は小屋から走って出ました。鶏は狐を大鎌で切り刻み、兎と一緒に仲良く暮らしたとき。

これでお話はおしまい、私にはバターをおくれ。

No.36 Колобок(丸パン)

むかしむかし、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんが頼みます。「ばあさんや、丸パンを焼いておくれ」「何で焼けばいいんです？粉もないのに」「おやおや、ばあさん！箱の中をこそげで、粉置き場

を掃いたらいいさ。粉が集まるんじゃないか」

おばあさんは鳥の羽根をとりだして、箱の中をこそげで、粉置き場を掃きました。手に二すくいほどの粉があつまりました。スメタナとまぜあわせて、油で揚げて、窓に置いてさまそうとしました。

丸パンはしばらくそのままでしたが、突然飛び上がって転がり出しました。窓から腰掛けへ、腰掛けから床へ、床からドアへ、敷居を飛び越えて玄関へ、玄関から入口の段へ、入口の段から庭へ、庭から門へ、どんどんと。

丸パンは道を転がって行きました。向こうから兎がやってきました。「丸パン、丸パン！お前を食べちゃうぞ」「食べないで、うさぎさん！歌を歌ってあげるから」丸パンはこう言って、歌い始めました。

箱からこそげられて
粉置き場から掃き集められて
スメタナと混ぜられて
油で揚げられて
窓で冷まされた
おじいさんから逃げた
おばあさんから逃げた
兎さんから逃げるのもかんたんさ！

そして先へと転がって行きました。兎の眼にもとまらないくらい！

丸パンは転がって行きました。向こうから狼がやってきました。「丸パン、丸パン！お前を食べちゃうぞ」「食べないで、おおかみさん！歌を歌ってあげるから」

箱からこそげられて
粉置き場から掃き集められて
スメタナと混ぜられて
油で揚げられて
窓で冷まされた
おじいさんから逃げた
おばあさんから逃げた
兎さんから逃げた
狼さんから逃げるのもかんたんさ！

そして先へと転がって行きました。狼の眼にもとまらないくらい！

丸パンは転がって行きました。向こうから熊がやってきました。「丸パン、丸パン！お前を食べちゃうぞ」「くまさんなんかには食べられやしないよ！」

箱からこそげられて

粉置き場から掃き集められて
 スメタナと混ぜられて
 油で揚げられて
 窓で冷まされた
 おじいさんから逃げた
 おばあさんから逃げた
 兎さんから逃げた
 狼さんから逃げた、
 熊さんから逃げるのもかんたんさ！
 そしてまた転がって行きました。熊の眼にもとまら
 ないくらい！

丸パンはどんとどんと転がって行きます。向こうから
 狐がやってきました。「こんにちは、丸パンくん！なん
 てすてきなんでしょうね」丸パンは歌い始めました。

箱からこそげられて
 粉置き場から掃き集められて
 スメタナと混ぜられて
 油で揚げられて
 窓で冷まされた
 おじいさんから逃げた
 おばあさんから逃げた
 兎さんから逃げた
 狼さんから逃げた、
 熊さんから逃げた、
 狐さんからだって逃げられるさ！

「なんてすてきな歌だろう！」と狐は言いました。
 「でも私はね、丸パンくん、年寄りになってね、耳が
 悪いのさ。私の鼻の上に座ってもう一度、もうちょっと
 大きな声で歌っておくれよ」丸パンは狐の鼻の上に
 座って、同じ歌を歌い始めました。「ありがとう、丸パ
 ンくん！すてきな歌だわ、もっと聞きたいわねえ！私
 の舌の上に座って、もう一度だけ歌っておくれ」キツ
 ネはこう言って、舌を出しました。丸パンは狐の舌の
 上に飛び乗りました。狐は「いただきますっ！」と食
 べてしまいました。

No.56 Волк-дурень (愚かなオオカミ)

それは昔々、まだキリストが使徒たちと共に地上を
 歩いておられたころのことです。キリストと使徒たちが
 広い道を歩いていると、オオカミが向こうからやっ
 きて言います。「主よ！腹が減りました！」「行って馬

を食べるがよい」とキリストはオオカミに言いました。
 オオカミは馬を探しに駆け出しました。馬を見つけて、
 近寄るとこう言いました。「馬よ！主がお前を食べるよ
 うにおおせになった」馬は答えます。「滅相もない！食
 べないでください、困ります。私には赦免状
 があるのですよ、遠くに忘れてきましたけど」「見せて
 みる！」「後ろ脚にもっと近づいてください」オオカミ
 は近寄って、馬は後ろのひづめで歯をへし折りました。
 オオカミは三サージェンふっ飛んで、馬は逃げまし
 た。

オオカミは苦情を訴えに行きました。キリストの所
 へやってくるとういいます。「主よ！馬には殺されそ
 うになりました！」「行って羊を食べるがよい」オオカミ
 は羊の所へ行きました。駆け寄るとこう言います。「羊
 よ、お前を食べるぞ、主がお命じになったのだ」「どう
 ぞ食べてください！山の下に立って、口を大きく開
 けているといいでしょう、私は山の上立って、全力
 で駆け下りてくれれば、あなたの口の中にちょうど入
 るでしょう！」オオカミは山の下に立って口を大きく開
 けました。羊は山から全速力で駆け下りて、額からオ
 オカミに激突しました。オオカミを突き倒して逃げて
 行きました。オオカミは立ち上がり、あちこち見まわ
 しますが、羊はいません！

また苦情を訴えに行きました。「主よ！羊も私を騙
 しました。殺されるどころでしたよ！」キリストは言われ
 ました。「行って仕立て屋を食べるがよい」オオカミは
 駆け出しました。向こうから仕立て屋がやってきました。
 「仕立て屋、お前を食べるぞ、主がお命じになっ
 たのだ」「ちょっと待て、身内に別れを言うてくるから」
 「だめだ、身内との別れなどさせるものか」「しかたな
 い！食うがいい。でも寸法だけとらせてくれ。お前の
 上に乗ってもいいかな？」「測ればいいさ！」とオオ
 カミは言います。仕立て屋は背後に回ると、オオカミ
 の尻尾をつかみ、腕に巻きつけると、打ちつけはじ
 めました。オオカミはさんざんにぶたれて、もがいて
 もがいて、尻尾をちぎって、一目散に逃げて行きました！
 力の限りに走って行くと、向こうからオオカミが七
 匹やってきます。「おい待て！」とオオカミたちは言
 います。「尻尾もなしでどうしたんだ？」「仕立て屋に
 ちぎられた」「どこに仕立て屋がいるんだ？」「あそこ
 の道を歩いてる」「追いかけてやろう」そして仕立て屋
 を追いかけはじめました。仕立て屋は追手が来るの

を聞きつけて、まずいことになったと悟り、急いで木に登り、一番てっぺんまでのぼって坐りました。

オオカミたちがやってきてこう言います。「仕立て屋を捕まえよう。尻尾のないやつ、一番下になれ、おれたちがお前の上に乗る、次々上に乗って行けば、手が届くだろうさ！」尻尾をなくしたオオカミは地面に横になり、その上にオオカミが乗り、その上に次のオオカミが乗り、その上にその次のオオカミが乗り、どんどん高くなって行きました。最後のオオカミがよじ登っていきます。仕立て屋はいよいよ追い詰められました。もう手が届こうとしている！そして上から叫びました。「尻尾のない奴は誰よりもひどい目にあうぞ！」尻尾のないオオカミは一番下から飛び出して走りだしました！七匹のオオカミはみな地面に落ちて後を追いかけて、捕まえると、ずたずたと引き裂いてしまいました。仕立て屋は木から下りると家に帰りました。

No.82 Терем мухи (蠅のおやしき)

蠅がおやしきを建てました。

シラミがやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。あなたはだれ？」「私はシラミ」

ノミがやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。そしてシラミです」

蚊がやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。そしてシラミです。そしてノミです」

ネズミがやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。そしてシラミです。そしてノミです。そして蚊です」

トカゲがやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。そしてシラミです。そしてノミです。そして蚊です。そしてネズミです」

キツネがやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。そしてシラミです。そしてノミです。そして蚊です。そしてネズミです。そしてトカゲです」

茂みの下からウサギがやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。そしてシラミです。そしてノミです。そして蚊です。そしてネズミです。そしてトカゲです。そしてキツネです」

灰色の尻尾のオオカミがやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。そしてシラミです。そしてノミです。そして蚊です。そしてネズミです。そしてトカゲです。そしてキツネです。そしてウサギです」

足の太いクマがやってきました。

「この立派なお屋敷にいるのは誰？誰？誰？」

「蠅です。そしてシラミです。そしてノミです。そして蚊です。そしてネズミです。そしてトカゲです。そしてキツネです。そしてウサギです。そして灰色の尻尾のオオカミです」

お屋敷からみんなが尋ねます「あなたはだれ？」

「叩き屋、倒し屋、潰し屋だ！」とクマは言って、足でお屋敷を踏みつけ、壊してしまいました。

No.159 Марья Моревна (マリヤ・モレーヴナ)

むかしむかし、とある国にイワンという皇子がいた。イワン皇子には三人の姉妹があった。一人目はマリヤ皇女、二人目はオリガ皇女、三人目はアンナ皇女といった。父と母は亡くなっていた。死ぬときには息子にこう命じたのだった。「最初におまえの姉妹たちに求婚してきた者に、嫁にやるのだ。そばに長くどめておくな！」皇子は両親を葬ると、悲しさで、姉妹たちといっしょに緑の庭へ散歩に出かけた。突然、黒雲が空に現れ、恐ろしい雷雨になった。「さあ家に帰ろう」とイワン皇子は言う。御殿に着くやいなや、雷が鳴り響き、天井が真二つに分かれ、みながいる部屋へりしいタカが飛び込んできて、タカは床に身を打ちつけると、立派な若者の姿になってこう言う。「こんにちは、イワン皇子！以前には遊びに来ていましたが、今、こうして来たのは結婚の申込みのためです。マリヤ皇女をに申込みをしたいのです」「本人があなたを気に入るなら、わたしは止めません。いいご縁でありますように！」マリヤ皇女は承知した。タカは姫をめとり、自分の国へ連れていった。

日は日を追って歩み、一刻は一刻に続いて駆けてゆき、一年があつというまに過ぎ去った。イワン皇子は二人の姉妹といっしょに緑の庭へ散歩に出かけた。するとまた黒雲と竜巻と稲妻が起こった。「さあ家に帰ろう」と皇子が言う。御殿に着くやいなや、雷が落ちて屋根が崩れ落ち、天井が真二つに分かれ、ワシが飛び込んできた。ワシは床に身を打ちつけると、立派な若者の姿になった。「こんにちは、イワン皇子！以前には遊びに来ていましたが、今、こうして来たのは結婚の申込みのためです」そしてオリガ皇女に申込みをした。イワン皇子は答える。「オリガ皇女があなたを気に入るなら、結婚するのがいいでしょう。姫の思う通りにさせますよ」オリガ皇女は承知して、ワシに嫁いだ。ワシは姫を自分の国へ連れていった。

さらに一年が過ぎた。イワン皇子は一番年下の姫に言う。「緑の庭へ散歩に行こう！」しばらく散歩していると、また黒雲と竜巻と稲妻が起こった。「家に帰ろう！」御殿に戻って、腰も下ろさないうちに、雷が落ちて天井が真二つに分かれ、カラスが飛び込んできた。カラスは床に身を打ちつけると、立派な若者の姿になった。以前の婿たちも美丈夫だったが、こちらはさらにりしかつた。「イワン皇子、以前には遊びに来ていましたが、今、こうして来たのは結婚の申込みのためです。アンナ皇女をわたしに下さい」そしてアンナ皇女に申込みをした。イワン皇子は答える。「姫の思う通りにさせますよ。あなたを気に入るなら、結婚するのがいいでしょう」アンナ皇女はカラスに嫁ぎ、カラスは姫を自分の国へ連れていった。

イワン皇子はひとり残った。まる一年は姉妹たちに会わずに暮らしたが、さびしくなってきた。「姉妹たちを探しにいこう」と皇子はいう。旅のしたくをととのえて、ずんずん歩いていき、ふと見ると、野原に軍勢が打ち負かされて倒れている。イワン皇子はたずねる。「だれか生きている者がいたら、返事をしてくれ！こんな大軍を打ち負かしたのはだれなんだ？」生きている者がこう返事をした。「この大軍を打ち負かしたのはマリヤ・モレーヴナ、うるわしい王女だ」イワン皇子はさらに先へとすすみ、白い天幕が並んでいるところへやって来た。皇子のほうへ出てきたのはマリヤ・モレーヴナ、うるわしい王女だった。「こんにちは、皇子さま、神のお導きでどこへ行くのでしょうか、自由な旅ですか、それともさせられているのでしょうか？」

イワン皇子は答えた。「立派な若者はさせられる旅などしません」「それでは、お急ぎのご用がなければ、わたしの天幕にお立ち寄りください」イワン皇子は喜んでそうすることにして、二晩天幕に泊り、マリヤ・モレーヴナが好きになって、結婚した。

マリヤ・モレーヴナ、うるわしい王女は、皇子を自分の国に連れ帰った。二人はしばらくいっしょに暮らしたが、王女はまた戦争に行きたくなかった。いろいろな世話をすべてイワン皇子にまかせ、こう言いのこしていった。「どこへ行っても、何を見てもいいわ。ただ、この物置だけはのぞかないように！」皇子はがまんできず、マリヤ・モレーヴナが出かけるやいなや、すぐに物置へ飛んでいき、ドアをあけてのぞきこんだ。するとそこには、不死身のコシチェイがぶら下がっていて、十二本の鎖で縛りつけられていた。コシチェイはイワン皇子にこう頼む。「哀れと思って、水を飲ませてくれ。十年のあいだここで苦しんでいる、食うことも飲むこともなく、喉がからからにかわいてしまった！」皇子は桶一杯の水をやった。それを飲み干してまたせがんだ。「桶に一杯では渴きはおさまらない。もっとくれ！」皇子は桶にもう一杯、水をやった。コシチェイはそれを飲み干すと三杯目をせがみ、三杯目の桶の水を飲み干したとたん、昔の力をとり戻して、鎖を揺り動かし、一度に十二本全部をちぎった。「ありがとう、イワン皇子よ」と不死身のコシチェイは言った。「だがもう二度とマリヤ・モレーヴナを見ることはないだろう、自分の耳と同じだよ」そして恐ろしい竜巻となって窓から飛び出し、途中でマリヤ・モレーヴナ、うるわしい王女に追いつくと、姫をさらって自分のところへ連れて行ってしまった。一方イワン皇子は大いに泣き、身じたくをすと旅に出た。「どんなことがあろうとも、マリヤ・モレーヴナを探し出してみせる」

一日歩き、二日歩き、三日目の明け方になってすばらしい宮殿が見えた。宮殿のわきに一本のオークの木が立っていて、そのオークの木にりりしいタカがとまっていた。タカは木から舞いおり、地面に身を打ちつけてりっぱな若者の姿に変わると、こう叫んだ。「おお、なつかしい義兄弟だ！神はお守りくださっていますか？」マリヤ皇女も駆け出してきて、イワン皇子を大喜びで出迎え、元気だったかどうかを訊ねたり、自分の暮らしを物語ったりはじめてた。皇子は三日間もてなしを受けてからこう言う。「長居はできない

のです。妻のマリヤ・モレーヴナ、うるわしい王女を探しに行きます」「探し出すのは難しいでしょう」とタカは答えた。「もしものときのために、銀のスプーンをここに残して行ってください。ずっと眺めながら、思い出していますから」イワン皇子はタカのもとに銀のスプーンをのこして出発した。

一日歩き、二日歩き、三日目の明け方になって、一つ目よりもっとすばらしい宮殿が見えてきた。宮殿のかたわらにオークの木が立っていて、そのオークにワシがとまっていた。ワシは木から舞いおり、地面に身を打ちつけて立派な若者の姿に変わると、こう叫んだ。「起きなさい、オリガ皇女！いとしい義兄弟がお見えだよ」オリガ皇女はすぐに駆け寄ってきて、キスをしたり抱きしめたり、元気だったかどうかを訊ねたり、自分の暮らしを物語ったりしはじめた。イワン皇子は三日の間もてなしを受けてからこう言う。「これ以上もてなしを受ける時間はありません。妻のマリヤ・モレーヴナ、うるわしい王女を探しに行きます」ワシは答える。「探し出すのは難しいでしょう。銀のフォークをここに残して行ってください。ずっと眺めながら思い出していますから」銀のフォークをのこして出発した。

一日歩き、二日歩き、三日目の明け方になって前の二つよりもっとすばらしい宮殿が見えてきた。宮殿のかたわらにオークの木が立っていて、そのオークにカラスがとまっていた。カラスはオークから舞いおり、地面に身を打ちつけて立派な若者の姿に変わると、こう叫んだ。「アンナ皇女！早く出ておいで、義兄弟がお見えだよ」アンナ皇女は駆け出してきて大喜びで迎え、キスをしたり抱きしめたり、元気だったかどうかを訊ねたり、自分の暮らしを物語ったりしはじめた。イワン皇子は三日の間もてなしを受けてからこう言う。「さようなら！妻を探しに行きます。マリヤ・モレーヴナ、うるわしい王女を」カラスは答える。「探し出すのは難しいでしょう。銀の煙草入れをここに残して行ってください。ずっと眺めながら思い出していますから」皇子は銀の煙草入れをのこして、別れの挨拶をして出発した。

一日歩き、二日歩き、三日目にマリヤ・モレーヴナのいるところにたどりついた。姫はいとしい人の姿を見ると、その首に抱きついて涙をながし、こう言った。「ああ、イワン皇子さま。なぜわたしの言うとおりにし

なかったのです？物置をのぞいて、不死身のコシチェイを逃がしてしまうなんて」「許してくれ、マリヤ・モレーヴナ！過ぎたことは忘れてくれ。一緒に逃げよう、不死身のコシチェイが気づかないうちに。逃げ切れるかもしれない！」したくをして逃げ出した。コシチェイの方は狩をしていた。夕方になり家に帰りかけると、乗っている駿馬がつかずいた。「この痩せ馬め、どうしてつかずいたりするのだ？それとも何か悪い虫の知らせか」馬は答える。「イワン皇子がやってきて、マリヤ・モレーヴナを連れ去りました」「追いつけるだろうか」「小麦の種をまいて、育つまで待って、刈り取って脱穀して粉にして、ペチカ五つ分のパンを焼いて、そのパンを食べて、それから追いかけたって間にあいますよ！」コシチェイは馬をとばしてイワン皇子に追いついた。「やれやれ」という。「これがはじめてだから、水を飲ませてくれた親切に免じて赦してやろう。二度目も赦すが、三度目は気をつける。細かく切り刻んでやる！」マリヤ・モレーヴナを奪い、連れ去った。イワン皇子は石の上に腰をおろして泣き出した。

さんざん泣いてから、もう一度マリヤ・モレーヴナのためにひき返した。不死身のコシチェイは留守だった。「逃げ出そう、マリヤ・モレーヴナ！」「あら、イワン皇子！追いつかれるでしょう」「追いつかれてもいい、一時間か二時間でもいっしょにいられたら」したくをして逃げ出した。不死身のコシチェイが家に帰りかけると、乗っている駿馬がつかずいた。「この痩せ馬め、どうしてつかずいたりするのだ？それとも何か悪い虫の知らせか」馬は答える。「イワン皇子がやってきて、マリヤ・モレーヴナを連れ去りました」「追いつけるだろうか」「大麦の種をまいて、育つまで待って、刈り取って脱穀して、ビールを仕込んで、酔っぱらうまで飲んで、寝たいだけ寝て、それから追いかけたって間にあいますよ！」コシチェイは馬をとばしてイワン皇子に追いついた。「言っておいたじゃないか、マリヤ・モレーヴナにはもう逢えないぞ、自分の耳と同じだよ」とそして妻を奪い、連れ去った。

イワン皇子はひとり残って、さんざん泣いてから、またマリヤ・モレーヴナのために引き返した。そのときコシチェイは留守にしていた。「逃げ出そう、マリヤ・モレーヴナ！」「あら、イワン皇子！また追いつくでしょう、そして細かく切り刻まれてしまうでしょう！」「切り刻まれてもいい！おまえなしでは生きていけないよ」

したくをして逃げ出した。不死身のコシチェイが家に帰りかけると、乗っていた駿馬がつかずいた。「どうしてつかずくのだ？何か悪い虫の知らせか」「イワン皇子がやってきて、マリヤ・モレーヴナを連れ去りました」コシチェイは馬をとばしてイワン皇子に追いつくと、とても細かく切り刻んで、松脂をぬった樽につめた。この樽に鉄のたがを何本もはめて、青い海の中に投げこみ、マリヤ・モレーヴナを連れ帰った。

ちょうどそのとき、イワン皇子の義兄弟たちの家では銀器が黒ずんだ。「おお」と彼らは言う。「きっとよくないことが起きたのだ！」ワシは青い海へ急ぎ、樽をつかんで岸へひき上げ、タカは生の水を取りに、カラスは死の水を取りに飛び立った。三羽はある場所に集まって、樽をこわし、細切れになったイワン皇子をひき出して水で洗い、もとおりの姿に並べた。それからカラスが死の水をふりかけると、からだは一つにつながった。タカが生の水をふりかけると、イワン皇子はぶるっと身ぶるいして立ち上がり、こう言う。「ああ、なんと長い間寝ていたのだろう！」「もっと長く眠っていたかもしれませんが、もしわたしたちが来なければ！」と義兄弟たちは言った。「さあ、わたしたちのところへ遊びに来てください」「いや、できません！わたしはマリヤ・モレーヴナを探しに行きます」

妻のところへ行って、こう頼む。「不死身のコシチェイから聞き出してくれ、あんな駿馬をどこで手に入れたのか」そこでマリヤ・モレーヴナが折を見はからってコシチェイから聞き出そうとした。コシチェイはこう言った。「九の三倍の国の向こう、三十番目の帝国に、火の川のむこうにヤガーばあさんが住んでいる。大した雌馬をもって、毎日その馬で世界をひとまわりしている。ほかにもすばらしい雌馬をたくさんもっている。わしは三日間ばあさんの牧童をつとめて、雌馬を一頭もなくなさなかった。その褒美にヤガーばあさんから子馬を一頭もらったのだ」「火の川はどうやってわたったの？」「不思議なプラトックを持っているのだ。右に三回振ると、高い高い橋ができて、火も届かないのさ！」マリヤ・モレーヴナはすっかり聞き出して、イワン皇子に全部伝えて、プラトックも持ち出して渡した。

イワン皇子は火の川をわたり、ヤガーばあさんのところへむかった。飲まず食わずで長い間歩いていった。渡り鳥が小さなひな鳥たちを連れてやってくるの

に出会った。イワン皇子は言う。「ひなを一羽食べるとしよう」「食べないでください、イワン皇子さま」と渡り鳥が願う。「いつかお役に立ちますから」イワン皇子は先にすすんだ。森の中に蜜蜂の巣を見つけた。「蜜を少々取るとしよう」と皇子が言う。すると女王蜂が応える。「わたしの蜜に手を出さないでください、イワン皇子さま！いつかお役に立ちますから」皇子は蜜にふれずに先にすすんだ。子連れ雌ライオンがやってくるのに出会った。「このライオンの子でもいいから食べよう。腹が減って苦しくなってきた！」「この子に手を出さないでください、イワン皇子さま」と母ライオンは願った。「いつかお役に立ちますから」「わかった、言うとおりにしよう！」

腹を空かせたままよろよろ歩いていくと、ヤガーばあさんの家が立っている。家のまわりには十二本の竿が立ちならび、そのうちの十一本には人間の首が一つずつ刺さっていたが、一本だけはあいていた。「こんにちは、おばあさん！」「こんにちは、イワン皇子！何をしに来たのかね。自分からすすんで来たのか、それとも何かほしい物があるのかい？」「ここで働いて、勇士のための馬をもらうために来たのです」「いいとも、皇子さま！ここでは一年も働くことはない、たった三日だけだ。雌馬をちゃんと守れたら、勇士のための馬をやろう、できなかったときは、怒るんじゃないよ、おまえの首を最後の竿に突き刺すから」イワン皇子は承知した。ヤガーばあさんは皇子に飲み食いさせて、仕事にとりかかるように命じた。雌馬たちを野原に連れ出したとたん、馬たちは得意げに、草原のあちこちへと駆け出した。皇子が目で見えなくなり、すべて消え失せた。そこで皇子は悲嘆にくれて泣き出し、石に腰をおろしたまま寝入ってしまった。太陽が沈みかけたところへ、渡り鳥が飛んできて皇子を起こした。「起きてください、イワン皇子さま！雌馬たちはもう家にいます」皇子は立ち上がって家に帰った。ヤガーばあさんが大声で雌馬たちをどなりつけていた。「どうして家に戻ってきたんだ？」「どうやったら戻らずにいられるんです？鳥たちが四方八方から飛んできて、あやうく目玉をほじくられそうになったんです」「それなら、あしたは草原へは行かないで、深い森の中に散らばるんだね」

イワン皇子はひと晩ねむった。翌朝ヤガーばあさんはこう言う。「いいかい、皇子さま、雌馬をちゃんと

守れず、一頭でも迷子になったら、おまえの威勢のいい頭もあの竿にささるのだから！」皇子は雌馬たちを野原に連れ出した。すぐに馬たちは、得意げに深い森のあちこちへと駆け出した。またも皇子は石の上に腰をおろし、泣いて、泣いて、そして寝入ってしまった。太陽が森のむこうに沈んで、雌ライオンが駆けてきた。「起きてください、イワン皇子さま！馬たちはみんな集まっています」イワン皇子は立ち上がって家に帰った。ヤガーばあさんは前よりもいっそう大声で雌馬たちをどなりつけていた。「どうして家に戻ってきたんだ？」「どうやったら戻らずにいられるんです？猛獣たちが四方八方から駆けてきて、あやうく八つ裂きにされるところでした」「それなら、あしたは青い海に駆け込むんだね」

イワン皇子はもうひと晩ねむり、翌朝ヤガーばあさんは皇子を雌馬の番におくりだした。「もしもちゃんと守れなかったら、おまえの威勢のいい頭はあの竿にささるんだよ」皇子は雌馬たちを野原に連れ出した。すぐに馬たちは得意げに目のまえから消えて、青い海に駆けこんだ。首まで水につかって立っている。イワン皇子は石の上に腰をおろして泣き出し、眠りこんでしまった。太陽が森のむこうに沈んで、蜜蜂が飛んできて言う。「起きてください、皇子さま！馬たちはみんな集まっています。家に戻ったら、ヤガーばあさんに見られないように馬小屋へ行って、飼葉桶のかげにかくれなさい。馬小屋にきたならしい子馬が一頭いて、馬糞のなかで転がっていますから、その馬を盗んで、真夜中に逃げ出すのです」

イワン皇子は立ち上がって、馬小屋に入り込み、飼葉桶のかげに横になった。ヤガーばあさんは大声で雌馬たちをどなりつけていた。「どうして戻ってきたんだ？」「どうやったら戻らずにいられるんです？おびたしい蜂が四方八方から飛んできて、あらゆる向きに刺しはじめて、血が出るほどでした！」

ヤガーばあさんが寝入ってしまったので、真夜中にイワン皇子はきたならしい子馬を盗んで鞍をおき、その鞍にまたがって火の川のほうへ駆け出した。川に着いてプラトークを右に三回振ると、突然、どこからともなく高い見事な橋があらわれて川にかかった。皇子が橋をわたりきってプラトークを左に二度だけ振ると、川にかかる橋は細く細くなってしまった！あくる朝ヤガーばあさんが目をさますと、きたならしい子馬

が姿を消している！あわててあとを追いはじめた。鉄の臼を全力で走らせ、杵で駆り立て、箒で跡を消す。火の川に着いて眺め、「いい橋じゃないか！」と思った。橋をわたりはじめてちょうど真中まできたとたん、橋は折れて、ヤガーばあさんは川の中へ落ちた。こうしてばあさんは無残な最期をとげた！イワン皇子は緑の草原で子馬に草を食べさせた。するとすばらしい馬になった。

皇子はマリヤ・モレーヴナのもとへやってくる。マリヤは駆け出してきて、皇子の首に抱きついた。「神さまはどうやってあなたを生き返らせてくださったの？」「それはこういうわけなのさ」と皇子は話して聞かせる。「いっしょに逃げよう」「こわいわ、イワン皇子！もしコシチェイが追いついたら、またあなたを切り刻んでしまうでしょう」「いや、もう追いつけないよ！こちらにもすばらしい勇士の馬がいる、鳥が飛ぶように走るよ」二人は馬に乗って逃げ出した。不死身のコシチェイがわが家に戻りかけると、乗っている馬がつかずいた。「この痩せ馬め、どうしてつかずいたりするのだ？それとも何か悪い虫の知らせか」「イワン皇子がやってきて、マリヤ・モレーヴナを連れ去りました」「追いつけるだろうか」「わかりませんね！今ではイワン皇子も勇士の馬を持っています、わたしよりいい馬ですよ」「いや、がまんできない」と不死身のコシチェイが言う。「追いかけてよ」長い間か、短い間か、コシチェイはイワン皇子に追いついて、地面にとびおると、鋭い剣で皇子を斬り殺そうとした。そのときイワン皇子の馬がその蹄でかっぱい不死身のコシチェイを蹴り上げ、コシチェイの頭を割った。皇子は棍棒で敵を打ちのめした。それから皇子は薪を山のように積み上げて火をつけ、不死身のコシチェイを焼くと、その灰を風にまき散らした。

マリヤ・モレーヴナはコシチェイの馬に乗りかえ、イワン皇子は自分の馬にまたがって、最初はカラスのもとへ、つぎはワシのもとへ、それからタカのもとへと訪ねていった。どこへ行ってもみんな大喜びだった。「ああ、イワン皇子、もう会えないかと思っていましたよ。それにしても、あなたの苦労も報われましたね。マリヤ・モレーヴナのように美しい人は、世界中を探してもいないでしょう！」お客としてもてなしを受け、宴会をしてもらい、自分の国へ帰った。帰りついてからは、財をたくわえ、蜜酒を飲んで楽しい暮らしをした。

No.267 Царевна-лягушка (お妃は蛙)

昔々、昔のことだが、ある皇帝のもとに三人の息子がいた。みんな年頃になった。皇帝は言う。「子どもたちよ！大弓を作って矢を放つのだ。矢をもってきた女性が花嫁だ。誰も矢を持って来なかったら、つまり嫁をもらわないということだ」長男が放つと、王侯の娘が矢を持ってきた。次男が放つと、將軍の娘が矢を持ってきた。ところが、末のイワン皇子のところへは、沼から蛙が矢を啜えてやってきた。兄さんたちは楽しく喜んでいて、イワン皇子は思いに沈んで泣いた。「どうして蛙と暮らせようか？添い遂げるといのは、河を渡るのや野を横切るとは違うのに！」さんざん泣いたが、どうしようもなく、蛙を嫁にもらった。それぞれのしきたりに従って式を挙げた。蛙は皿に載せられていた。

こうして暮らしているうちに、皇帝はあるとき、嫁たちからの贈り物を見なくなった。誰が一番よい腕を持っているかを見なくなったのだ。命令を出した。イワン皇子はまた思いに沈んで泣く。「わたしの蛙が何を作れるものか！みんなの笑い物になるだけだ」蛙は床を這って、けろけろと鳴くばかり。イワン皇子が寝入ると、彼女は外へ出て、蛙の皮を脱ぎすて、美しい娘になって、こう叫んだ。「ばあやたち、ねえやたち！こうしてちょうだい！」ばあやたちとねえやたちはすぐさますばらしい出来ばえのルバシカをもってきた。彼女はルバシカをくるくる巻くとイワン皇子のそばに置き、自分はまた蛙の姿に戻った。まるで何事もなかったかのように！イワン皇子は目覚めて、喜んでルバシカを取り、皇帝のところへ持って行った。皇帝は受け取って眺めた。「このルバシカは主の日に着ることにしよう！」次男がルバシカを持ってきた。皇帝は言った。「風呂に行くときに着よう！」長男のルバシカを受け取ってこう言った。「黒い百姓家に行くときに着よう！」皇帝の息子たちは帰宅したが、二人はこんな風に話し合った。「イワン皇子の妻を笑ったのは間違いだっとな、あれは蛙なんかじゃない、魔法使いじゃないか！」

皇帝はまた命令を出して、嫁たちがパンを焼いて持ってくるように、誰が一番料理が上手か見せるよう

に、といった。ほかの嫁たちははじめ、蛙のことを笑っていた。ところが、こういうことになったので、小間使いに、どんなふうに料理をするのか見てくるように命じた。蛙は察して、練り粉をこねて、丸めて、かまどの上に穴をあけて、そこから練り粉を放り込んだ。小間使いはそれを見て、走って戻ると、ご主人である皇子の妻たちに告げて、そのとおりにした。一方、賢い蛙は、彼女たちが帰ると、すぐに生地をかまどから掻きだして捨てて、すっかりきれいにして、穴をふさいで、何事もなかったようにした。そして自分は玄関の外に出ると、蛙の皮を脱ぎすてて叫んだ。「ばあやたち、ねえやたち！パンをこしらえてちょうだい、お父様が日曜日やお祭りのときにだけ食べていたようなパンを」ばあやたちとねえやたちはすぐさまパンを持ってきた。彼女はパンを受け取ってイワン皇子のそばに置き、自分は蛙の姿になった。イワン皇子は目覚めて、パンを持って皇帝のところへ出かけた。父はちょうどそのとき、兄さんたちのパンを受け取っていた。兄さんたちの妻たちは、蛙がやってみせたように、パンをかまどに投げ込んだので、パンは団子のようになっていた。皇帝は長男のパンを最初に受け取って、眺めて、台所へ戻させた。次男のパンも受け取って、同じように送り返した。イワン皇子の番になったので、自分が持ってきたパンを出した。父は受け取って眺めてこう言う：「これこそパンと言うものじゃ、主の日に食べるとうしよう！兄の嫁たちのは生焼けじゃ！」

このあと皇帝は舞踏会を開こうと思立った。嫁たちの中で誰が一番踊りがうまいか？すべての客たちや兄嫁たちが集まったが、イワン皇子は行かず、思いに沈んだ。「蛙と一緒になど行けるものか？」そしてわれらのイワン皇子は泣きじゃくった。蛙はこう言う。「泣かないで、イワン皇子！舞踏会へお出かけなさい。私も一時間後にいきますから」イワン皇子は蛙がこう言うのを聞いて少し喜んで、出かけた。蛙は皮を脱ぎすてて、見事に着飾った！舞踏会にやってきた。イワン皇子は喜び、皆も手をたたいた。なんという美しさ！食事を始めると、皇子の妻は骨を袖の中に入れて、ちよっと飲むと、残りほう一方の袖の中へ入れた。兄嫁たちはそのしぐさを見て、同じように、骨を袖に入れて、ちよっと飲むと、残りほう一方の袖の中

へ入れた。踊りの番がきた。皇帝は兄たちの嫁を踊らせようとしたが、兄嫁たちは蛙に先に踊らせた。彼女はすぐにイワン皇子と踊りだした。その踊りといったら、そのターンのすばらしいことといったら！右の袖を振ると、森と水が現れ、左の袖を振ると、さまざまな鳥が飛び立つのだった。みんなが仰天した。踊り終わるとそれらは消えてしまった。ほかの兄嫁たちも踊りだして、同じようにしようと思ったが、右の袖を振るやいなや、骨が飛び出してみんなに当たり、左の袖を振ると水がこぼれてやはりみんなにかかった。皇帝は怒って叫んだ。「もうたくさんじゃ！」兄嫁たちは下がった。

舞踏会が終わった。イワン皇子は先に帰って、妻の皮を見つけると、つまんで焼いてしまった。妻が帰ってきて皮を探すが、ない！焼かれてしまった。イワン皇子といっしょに横になったが、朝が来る前に彼に言う。「ああ、イワン皇子、すこし辛抱が足りませんでしたわね。あなたのものになれるはずだったのに、こうなってはどうしようもありません。さようなら！私を探しに来てください、九の三倍の国の向こう、三十番目の帝国へ」そして皇子の妻は姿を消した。

一年がたち、イワン皇子は妻が恋しくなった。二年目に支度をして、父の許しを得て、母の祝福を得て出発した。長く歩いて、突然小屋の前に出た。森に正面を向け、彼の方には背を向けている。彼は言う：「小屋よ、小屋よ！元通りに、母さんが建てたときのようになれ、森に背を向けて、私に正面を向けて」小屋はぐるりと回った。小屋に入った。老婆が座っていてこう言う。「フ、フ！ロシアの骨のことなぞ聞いたこともなかったし、見たこともなかったが、今、ロシアの骨が自分でやってきたぞ！どこへ行くのかね、イワン皇子？」「おばあさん、まずは飲ませて食わせておくれ、いろいろ聞くのはそれからだ」老婆は飲ませて、食べさせてくれた、そして寝る支度をしてくれた。イワン皇子は彼女に言う。「ばあさん！うるわしのエレナ姫を取り戻しに行くんだ」「おやおや、それはずいぶん遅かったね！彼女ははじめのうちはお前さんのことをいつも思い出していたのに、今では思い出さなくなったよ、ここへもめつきり来なくなった。もっと先へ行くんだね、姉さんがいるから。姉さんはもっとよく知っているよ」

イワン皇子は朝出発して、小屋に着くとこう言う。

「小屋よ、小屋よ！元通りに、母さんが建てたときのようになれ、森に背を向けて、私に正面を向けて」小屋はぐるりと回った。小屋に入った。見ると老婆が座っていて、こう言う。「フ、フ！ロシアの骨のことなぞ聞いたこともなかったし、見たこともなかったが、今、ロシアの骨が自分でやってきたぞ！どこへ行くのかね、イワン皇子？」「それだがね、ばあさん、うるわしのエレナ姫を取り戻しに行くんだ」「おや、イワン皇子」と老婆は言った。「なんて遅かったんだろう！もうお前さんのことは忘れかけているよ、他の男に嫁ごうとしているよ、まもなく婚礼さ！今は、いちばん上の姉さんのところで暮らしているよ、そこまで行って見てごらん。お前さんが近づいて、正体がわかったら、エレナは紡ぎ棒に化けるだろう、そしてドレスは金になるだろう。姉さんは金の糸を撚りはじめるだろう、金の糸を巻き取ったら、箱に入れて、箱に鍵を掛けるだろう、お前さんは鍵をみつけて、箱を開けて、紡ぎ棒を折るんだよ、端っこが後ろになって、根元が自分に向くように投げるんだ、そうしたら彼女がお前さんの前に現れるよ」

イワン皇子は出発して、老婆のところにたどりついて、小屋に入った。老婆は金の糸を撚っていて、紡ぎ棒に巻き取り終わると、箱に入れて鍵を掛け、鍵をどこかへしまった。彼は鍵を取って箱を開け、紡ぎ棒を取り出して、言われたとおりに、決まりの通りに折った。端っこが自分の後ろに、根元が自分の前になるように。突然目の前にうるわしのエレナ姫が現れて、こういった。「あら、やっと来てくださったのね、イワン皇子！他の人に嫁ぐところだったわ」花婿は今にも現れそうだった。うるわしのエレナ姫は老婆の家の空飛ぶじゅうたんを取りだすと、上に乗って、鳥が飛びたつように空を飛んだ。花婿が突然やってきて、二人が逃げ出したことを知った。花婿も知恵者だった！二人を追いかけて、追いかけて追いかけて、あと十サーゼンというところまで追った。二人は空飛ぶじゅうたんでルーシの国に飛び込んだ、花婿はルーシの国には入ることができず、引き返した。二人は家に帰りついて、みんなが喜んで、豊かに楽しく幸せに暮らした。

№.268 Царевна-лягушка (お妃は蛙)

ある皇帝のもとに三人の息子がいた。皇帝は彼らに矢を与えて放つように命じた。矢が行ったところから花嫁を貰うのだ。長男が放つと、彼の矢は將軍の屋敷に落ちて、將軍の娘が矢を拾った。彼は出かけて行ってこう言った。「娘さん、娘さん！私の矢を返してください」彼女はこう言う。「私を妻にして下さい！」二番目の息子が放つと、彼の矢は商人の屋敷に落ちて、商人の娘が矢を拾った。彼は出かけて行ってこう言った。「娘さん、娘さん！私の矢を返してください」彼女はこう言う。「私を妻にして下さい！」三番目が放つと、彼の矢は沼に落ちて、蛙が拾った。彼は出かけて行ってこう言った。「蛙さん、蛙さん！私の矢を返してください」彼女はこう言う。「私を妻にして下さい！」

こうして三人は父のところへやってきて、誰の矢がどこへ落ちたかを語ったが、末の息子は、自分の矢が沼の蛙のところへ行ったことを告げた。「そうか」と父は言った。「つまりそれがお前の運命じゃ」こうして彼は息子たちを結婚させ、酒宴を催した。酒宴では若き花嫁たちが踊りを始めた。一番上の花嫁が踊って手を振ると、夫の父に当たって怪我をさせた。次の嫁が踊って手を振ると、夫の母に当たって怪我をさせた。三番目の蛙が踊りはじめ、手を振ると、牧草地と庭園が現れた。みんながあっと驚いた！

彼らは横になって休んだ。蛙は蛙の皮を脱いで人間になった。夫はその皮をペチカに放り込んでしまった。皮は燃えだした。蛙は臭いでわかって、皮をつかみだすと、夫であるイワン皇子に腹を立てて、こう言う：「さて、イワン皇子さま、私を七つ目の帝国へ探しにいらっしゃいね。鉄の長靴を履きつぶし、三つの鉄の聖餅を食べつくすまで！」飛び立って、飛び去ってしまった。

どうしようもなく、探しに出かけることにした。鉄の長靴と三つの鉄の聖餅をもって。歩いて歩いて、鉄の長靴を履きつぶし、三つの鉄の聖餅を食べつくした。そしてさらにお腹がすいた。カマスに出くわした。カマスに言う。「腹が減っているんだ、お前を食べるよ！」「いいえ、私を食べないで。お役にたちますから」さらに先へいった。熊に出くわした。イワン皇子は

熊に言う。「腹が減っているんだ、お前を食べるよ！」「いいえ、私を食べないでください。お役にたちますから」イワン皇子は空腹のまままた歩き出した。雌の鷹が飛んでいた。鷹に言う。「お前を食べるよ！」「いいえ、私を食べないでください。お役にたちますから」また同じように歩きだした。カニが這っていた。イワン皇子はカニに言う。「お前を食べるよ！」「いいえ、私を食べないでください。お役にたちますから」

イワン皇子はまた歩き出した。小屋が立っていたので、中に入って行った。そこには老婆が座っていて、こう尋ねる。「おやイワン皇子、用事があって来たのかね、用事から逃げてきたのかね？」イワン皇子はこう言う。「蛙を探しているんだ、自分の妻を」老婆は言う。「おや、イワン皇子、あの子はお前さんを殺そうと思っているよ。私は母親さ。イワン皇子、海の向こうへ行きなさい、そこには石があって、石の中には鴨がいて、鴨の中には卵がある。この卵を私のところへ持ってくるんだ」彼は海の向こうへ出発した。海辺に着くと言う。「私のカマスはどこにいる？魚の橋をかけてくれるといいのに」どこからともなくカマスが現れて、魚の橋をかけた。橋を渡って石のところへ着いた。打っても打っても石は割れないので、こう言う。「私の熊はどこにいる？この石を割ってくれるといいのに」熊が現れて、割りにかかると、割れた。鴨がそこから飛び出してきて飛び去った。イワン皇子は言う。「私の鷹はどこにいる？あの鴨を捕まえてきてくれるといいのに」見ているうちに鷹が鴨を引きずってきた。鴨をつかんで切り裂くと、卵を取りだした。洗おうとして水に落としてしまった。「私のカニはどこにいる？」とイワン皇子は言う。「卵を取り戻してくれるといいのに！」見ているうちにカニが卵を持ってきた。彼は卵を持って老婆の小屋へ行き、卵を渡した。老婆は生地を作り、卵を入れてパンを焼いた。イワン皇子には、物入れに隠れるように言い、こう命じた。「もうじきお前さんの蛙が飛んでくる、お前さんは黙っていて、わたしが指図したら立つんだよ」彼は物入れの中に座った。蛙が飛んできて、鉄の杵を鳴らしてこう言う。「フ！ロシア人の臭いがするわ。イワン皇子なんかがやってきたのなら、引き裂いてやるんだけど！」母の老婆は彼女に言う。「ルーシを飛び回ってきたから、ロシア人の臭いがしみついたんだろうよ。ほら、このパンをおあがり」彼女はパンをすっかり食べて、ほん

のひとかけだけ残った。そしてこう言う。「私のイワン皇子はどこにいるのかしら？会いたいわ。このパンのかけらを分け合って食べられたらいいのに」母はイワン皇子に出てくるように命じた。彼は出てきた。蛙は彼を抱きしめて、一緒に七番目の帝国へ行き、共に暮らした。

みんなが喜んで、豊かに楽しく幸せに暮らした。

No.269 Царевна-лягушка (お妃は蛙)

あるところに皇帝と妃が暮らしていた。皇帝には三人の息子があつた。みな若く、独り身で、立派な若者だった。昔話でも語れず、ペンで描くこともできないほどだった。末っ子はイワン皇子という名だった。皇帝は息子たちにこう言う。「いとしいわが子よ、矢を用意せよ、強弓につがえて、それぞれ違う向きに放て。その矢が落ちた屋敷で嫁をもらうのだ」長兄が矢を放つと、矢は大貴族の屋敷に、娘のいる館の真向かいに落ちた。次兄が矢を放つと、矢は商人の屋敷に飛んでいき、美しい玄関で止まった。その玄関には商人の愛らしい娘が立っていた。末の弟が放つと、矢は泥だらけの沼に落ちて、ケロケロ蛙がつかんだ。イワン皇子は言う。「ケロケロを娶(めと)ることなどできようか？ケロケロは私にふさわしい相手ではない！」「娶るのだ！」と皇帝は答える。「それがお前の運命だということだ」

こうして皇子たちは結婚した。長兄は大貴族の娘と、次兄は商人の娘と、そしてイワン皇子はケロケロ蛙と。皇帝は息子たちを呼び、命じる。「おまえたちの妻に、明日までに、私のためにやわらかい白パンを焼かせるのだ」イワン皇子は自分の御殿に気落ちして戻ってきたが、両肩よりも低くうなだれていた。「ケロケロ、イワン皇子さま！どうしてそんなに悲しんでいるのですか？」蛙が尋ねる。「お父様から何か嬉しくないお話があつたのでしょうか？」「嘆かずにいられようか？父上はお前に明日までに柔らかない白パンを焼くようにと命じられたのだ」「皇子さま、嘆くことはありません！横になっておやすみください。朝は夜より賢いものです！」皇子を寝かせると、蛙の皮を脱ぎ捨てて、愛らしい娘の賢きワシリーサに姿を変えた。美しい玄関に出て、大きな声で叫んだ。「ねえやたち、

ばあやたち！集まって、支度をするのよ、柔らかない白パンを焼くのよ、私がお父様のところで食べていたようなパンを」

朝、イワン皇子が目を覚ますと、ケロケロ蛙はとつくにパンを用意していた。そのすばらしいことといったら、思い描くことも、思い当たることもできないくらい、昔話で語るのがせいぜい！パンはさまざまな技を尽くして飾られていて、側面には帝都と関所が浮かび上がっていた。皇帝はイワン皇子にパンの礼を言うと、ただちに三人の息子たちに命じて言った。「おまえたちの妻に一晚で絨毯を織らせるのだ」イワン皇子は自分の御殿に気落ちして戻ってきたが、両肩よりも低くうなだれていた。「ケロケロ、イワン皇子さま！どうしてそんなに悲しんでいるのですか？」蛙が尋ねる。「お父様から何か辛いお話が、嬉しくないお話があつたのでしょうか？」「嘆かずにいられようか？父上は一晚で絹の絨毯を織るようにと命じられたのだ」「皇子さま、嘆くことはありません！横になっておやすみください。朝は夜より賢いものです！」皇子を寝かせると、蛙の皮を脱ぎ捨てて、愛らしい娘の賢きワシリーサに姿を変えた。美しい玄関に出て、大きな声で叫んだ。「ねえやたち、ばあやたち！集まって、支度をするのよ、絹の絨毯を織るのよ、私がお父様のところで座っていたような絨毯を！」

言ったとおりにになった。朝、イワン皇子が目を覚ますと、ケロケロ蛙はとつくに絨毯を用意していた。その不思議なことといったら、思い描くことも、思い当たることもできないくらい、昔話で語るのがせいぜい。絨毯は金銀の手の込んだ模様で飾られていた。皇帝はイワン皇子に絨毯の礼を言うと、ただちに新しく命じた、三人の皇子が揃って妻を連れてお目見えするようにと。イワン皇子はまたもや気落ちして戻ってきたが、両肩よりも低くうなだれていた。「ケロケロ、イワン皇子さま！どうしてそんなに悲しんでいるのですか？」蛙が尋ねる。「お父様から何か嬉しくないお話があつたのでしょうか？」「嘆かずにいられようか？父上はお前と一緒に目見えに来るように、と命じられたのだ。どうしてお前を人前に晒せるだろう！」「皇子さま、嘆くことはありません！皇帝のところへ一人でお出かけください。私はあとから行きます。がたがた、ごろごろという音が聞こえたら、こう言ってください。あれは私の蛙姫の乗り物です、と」

さて、兄さんたちは、念入りに着飾った妻を連れてお目見えに現れた。立ったまま、イワン皇子を笑う。「弟よ、どうして妻を連れずに来たのだ？ハンカチにでも包んで連れて来ればよかったのに！あんな別嬪をどこで見つけたんだっけ？沼という沼を探し歩いたのか？」突然、とても大きな、がたがた、ごろごろいう音がした。宮殿が丸ごと揺れだし、客たちはびっくり仰天して、席から飛び上がり、右往左往した。しかしイワン皇子は言う。「みなさん、怖がらないでください！あれは私の蛙姫が乗り物でやって来たのです」皇帝の玄関に金の幌馬車が飛ぶようにやってきた、六頭だての馬車だ、そして賢きワシリーサが降りてきた。その美しいことといったら、思い描くことも、思い当たることもできないくらい、昔話で語るのがせいぜい！イワン皇子の手を取ると、刺繍のクロスをかけたオークの食卓に連れて行った。

客たちは食べたり飲んだりして楽しみはじめた。賢きワシリーサはグラスから少し飲むと、残りは左の袖に流し込んだ。白鳥を食べると、骨は右の袖に隠した。兄皇子の妻たちは、姫がすることを見て、真似をいはじめた。そのあと、賢きワシリーサがイワン皇子と踊りだし、左袖を振ると湖ができ、右袖を振ると水面を白鳥たちが泳ぎ始めた。皇帝も客たちも驚いた。兄の花嫁たちが踊り始め、左袖を振るとしぶきが飛び、右袖を振ると、骨が皇帝の目を直撃した！皇帝は怒って、恥を知れと追い出してしまった。

そのあいだに、イワン皇子はすきを見て家に駆け戻り、蛙の皮を見つけると、燃えさかる火にくべてしまった。賢きワシリーサが駆けつけて、蛙の皮がないことに気づくと、がっかりして悲しみ、皇子にこう言う。「ああ、イワン皇子さま！なんていうことをなさったのですか？もう少し待ってくだされば、永遠にあなたの妻でいられたのに。でももうお別れです！三の九倍の国のかなた、三十番目の帝国で、不死身のコシチェイのもとで私を探してください」白い白鳥に姿を変えると、窓から飛んでいってしまった。

イワン皇子はひどく泣きだし、四方に向かって神に祈り、足の向くままに出発した。歩いたのは近くまでか、遠くまでか、長い間だったか、短い間だったか一年老いたじいさんが向こうからやってくるのに出くわす。「こんにちは」とじいさんは言う。「勇ましい若者よ！何を探しているのかな、どこへ行こうとしているの

か？」皇子は自らの不幸せを語って聞かせた。「おやおや、イワン皇子！どうして蛙の皮を燃やしたのかね？蛙の皮を着せたのはお前じゃないのだし、脱がせるのもお前じゃないよ！賢きワシリーサは、自分の父親よりも頭がよく、賢く生まれついたので。父親は娘に腹を立てて、三年の間ケロ蛙でいるようにと命じたのだ。お前さんに糸玉をあげよう。これが転がっていくところへ恐れずついていきなさい」

イワン皇子はじいさんに札を言うと糸だまのあとを追った。清い野原を行くと、熊に出会う。「さあ、けものを仕留めよう！」と言う。しかし熊は彼にこう言った。「殺さないでください、イワン皇子！いつかお役にたちますから」先へ進んで、見ると、頭上を雄ガモが飛んでいる。皇子は鳥を射ようとして銃の狙いを定めたが、鳥は突然人間の声でこう言った。「殺さないでください、イワン皇子！私もいつかお役にたちますから」皇子は哀れに思い、先へすすんだ。目つきの悪いウサギが走っている。皇子はふたたび銃を取り狙いを定めたが、ウサギは人間の声でこう言った。「殺さないでください、イワン皇子！私もいつかお役にたちますから」皇子は哀れに思い、先へすすんだ。青い海に着いて見ると、砂の上に横たわったカワカマスが死にそうになっている。「ああ、イワン皇子」とカワカマスが言った。「情けをかけてください、海に放してください」皇子はカワカマスを海に投げ込み、岸辺を歩き出した。

長い間か、短い間か—糸だまは転がって小屋に着いた。小屋は鶏の脚の上に建っていて、ぐるぐる回っていた。イワン皇子は言う。「小屋よ、小屋よ！昔のようになれ、母さんが建てたときのように—私に正面を向け、海に背を向けて」小屋は向きを変えて、海に背を向け、皇子に正面を向けた。皇子は小屋に入っていく。見ると、かまどの上、九番目のレンガの上に、骨の脚のバーバ・ヤガーが寝ている。鼻は天井まで伸び、鼻汁が敷居を越えてぶら下がり、おっぱいを鉤に巻きつけ、歯を研いでいる。「おや、りっぱな若者だ！なんで私のところへきたのかね？」バーバ・ヤガーはイワン皇子に尋ねる。「やれやれ、この老いぼればばあめ！若者にももの尋ねる前に、食わせて飲ませて、風呂であか落としてくれ、ものを聞くのはそれからだろう」

ヤガーばあさんは皇子に食べさせ、飲ませて、風

呂で垢を落としてやった。皇子は、妻の賢きワシリーサを探しているのだと語った。「ああ、知つとるよ！」とヤガーばあさんは言った。「いま、不死身のコシチェイのところにおる。取り戻すのは難しいぞ、コシチェイは手ごわい。コシチェイの死は針の先にあつて、針は卵の中にあつて、卵は鴨の中にあつて、鴨はウサギの中において、ウサギは長持の中において、長持は背の高いオークの木の上にあつて、その木は、コシチェイが自分の目のように大事にしているのじゃ」

ヤガーはそのオークの木がどんな場所に生えているのかを教えてくれた。イワン皇子はそこに着いたが、どうすればいいかわからない。どうやって長持を手に入れればいいのか？突然、どこからともなく熊が駆け寄ってきて木を根こそぎ引き抜いた。長持は落ちてこなごなに壊れ、長持からウサギが走り出して、全速力で逃げ出した。見ると、そのあとを別のウサギが追いかけて、追いつき、捕まえると、ずたずたに引き裂いた。ウサギから鴨が飛び出して、高く高く舞い上がった。そのあとから雄鶏が飛びかかり³、ぶつかると、その場で鴨は卵を落とし、卵は海に落ちた。イ

ワン皇子は災いの救いのなさに涙を流した。突然、カワカマスが岸に向かって泳いできて、口に卵をくわえている。皇子は卵を受け取り、割って針を取り出し、先を折った。コシチェイはどれほど抵抗しても、どれほどあがいても、もう死ぬほかにはなかった！イワン皇子はコシチェイの館に行き、賢きワシリーサを連れて家に帰った。そのあとは、二人は一緒に長い間幸せに暮らした。

文献

[日本語文献]

中村喜和(編訳)1987. アファナーシエフ ロシア民話集 (上)(下). 岩波文庫
金本源之助(訳)2009-2011. アファナーシエフ ロシアの民話(1)(2)(3)(別巻). 群像社

[ロシア語文献]

Афанасьев, А. Н(1984-1985) Народные русские сказки А. Н. Афанасьева: В 3 т. М.: Наука. (Лит. памятники)

¹ 新潟県立大学国際地域学部

² 「雄ガモ」という男性名詞を使いながら、「彼女」という女性の人称代名詞で受けており(ここでは「鳥」と訳した)、語り手はこの鳥を「雌」として扱っていることになる。

³ ここでも、上と同じ「雄ガモ」という男性名詞を使っているが、動詞は男性形にしており、「雄」として扱っている。一回目の使用と矛盾しており、この語り手の、鳥の名称に関する知識が曖昧であることが伺われる。